

□生來の不用者

小樽 藤野羊蹄

「君の様な不風流男が繪畫の稽古を初めた所でなんになる」と僕を評した人がある位生來の不用者で小學時代に學んだ鉛筆畫さいも十年後の今、進歩は愚か大に退歩して居るのて誠に恥かしい譯であります、繪葉書の流行は慥に日露戰役が預て力あると同じく僕も多少筆を採る事が出來たならばどんなに愉快だらうと思ふ中、恰も善し友人より水彩畫に經驗のある知己の人を紹介して呉れました、然し先方も俗事に忙殺せられて居る處から未だ親しく教を受けませんが暇々には大家の水彩畫葉書などを手本として覺束なくも、稽古を初めて居りました、が愈々一心に勉強しようと決心したのは一二年の後或る片田舎に田園生活(百姓の事も謂ひうべくば)をする事になるので、今の中に稽古を積まんければ、折角捕へた好機を失ふと思ふて熱心に研究して居ります、どうか貴誌が良師友となつて教へ導びかれんことを希望します。

□銀座通りへ廻り道

東京 川原星山

私は東京の生れてあるが、十四歳の時神戸に參りまして當地の小學校へ入りました、その時迄は繪畫の思想は皆無てありません。所が該小學校に入つて日本畫を教り何時の間にか繪が好になり、随分熱心になりました、卒業の間際の展覽會の時には選抜されて畫た事がありました。十六歳の春再び歸京致しました、住所は當時京橋でした、赤坂の大倉商業學校へ通ふのでして、日比谷の方を通らず毎日態々銀座の方へ回ります、その故は銀座通に八咫屋と云洋畫店がありますから。然し當時日本畫思想の私には洋畫は異様の感じがしましたが、毎日この店の前に立つこと凡そ二十分、その内に水彩畫を描きたき心地して、該店にて三宅先生スケッチ(水彩)を購ひ習ふ内に、一人の友人が摸寫よりも實寫の方が力がついて且面白味が深いと忠告されて、書籍を數冊積んで寫生したが私の水彩スケッチの抑の始でした。

□手製の畫架

東京 T II 生

戶外寫生の際、膝の上にて畫く時には、いつも畫架の必要を感じます東京にては直ぐにでも求められますが山間僻地では容易の事ではないと存じ是等の方の爲に手製の畫架を思ひ付ました、まづ餘り太くない三尺位ひの竹三本をとり上端に穴を穿ち針金線を通し輪に結び開閉自由の三脚を作り又別に八寸位ひの竹をとり其兩端に二本の長き釘を打抜き前の三脚の内二本の中央より、やゝ上部に穴をあけ是れに打抜きたる釘を差込みて、棧となし此上に畫板を立てかくるのであります

□人の知らざる愉快を

山 脇 生

昨年の秋であつた、學校の歸り途に日比谷公園へ立寄り「グラウンド」の東南隅の「ベンチ」に倚りて眺望すると、躑躅は夕日をあびて紫紺のような艶のある色で、蜿々として起伏してゐるさまは花のそれよりも趣きがある。其又後の建造物は、腰間樹木を點綴して聳えてゐるはよい景物である、あゝ繪か畫るならばこのよい景色を自由に「スケッチ」帖に挿入して人の知らぬ愉快を得るのであらうと思ふたのが、水彩畫に志す最初の動機なのであつた。